

V・E・フランクルの「人格論」についての人間学的考察（前編）

——『人格についての十の命題』を中心に——

廣岡義之

問題の所在

——現代のニヒリズムを打破する「人格論」の提唱——

『人格についての十の命題』(1)は、一九四六年におこなわれた「実存分析と現代の諸問題」、一九五〇年の「人格についての十の命題」「心理療法について」の三つの講演から構成されており、いずれもそれぞれの講演がおこなわれた時期に書かれた三つの著作、つまり『医師による魂の癒し』『制約されざる人間』『苦悩の人』の命題を総括したものである。三つの講演が、いずれも、「ロゴセラピー」と呼ばれる心理療法と実存分析と呼ばれる人間学的な研究方法を軸に考察されていることから『ロゴスと実存』という題名が付けられた。(2)

フランクル (Viktor Emil Frankl, 1905-1997) は

現代のニヒリズムを、存在の否定ではなく、存在の「意味」の否定として捉えた。(3) こうしたニヒリズムの行き着く先は、人格の否定、あるいは人間存在の価値と意味の否定である。フランクルはこうした「ニヒリズム」の他に、現代の大きな精神的問題として、人間を偶像化し神の地位にまで高める「悪しきヒューマニズム」(人間中心主義)を指摘している。これらは人間の「内在性」に固執し、人間の超越的特質を無視する、いわば「内在的なものの絶対化」に他ならない。(4)

ここで問題の核心は、現代の「ニヒリズム」が人間存在に含まれる「実存性」を奪いとり、そして「悪しきヒューマニズム」(人間中心主義)が人間存在の「超越性」を無視することにある。両者が含み持つ共

通の問題とは、現代社会で深刻に発生している「人格」の否定であり、人間存在の「価値と意味」の否定である。(5) こうした現代の時代精神の問題を背景に、われわれはここで特に、真の「人格」とはどういうものかまたそれが欠けるとどのような深刻な問題が生ずるかについてフランクルに従いつつ人間学的な考察を進めていく。

第一の命題

—— 人格とは分割しえない一人の個人である ——

第一に、「人格」とは分割しえないひとりの個人 (Individuum) である。「人格」は初めから「一なるもの」(Einheit) であり、けっして合成されるものではない。なぜなら「人格」はそれ自体で完結した統一体であり、存在の意味では既に全体を成しているからである。(6) たとえいかなる精神分裂病の場合であっても、実際にその人の「人格」が分裂しているわけではない。(7) たとえば「精神分裂病とか、もつ一つのパーソナリティをもっていると考えられるような極端な場合ですら、けっして本当の意味での人格の分裂がおこなわれているのではない」(8) ことをフランクルは強調する。

また「人格」は「新しい創造」という意味で唯一独自の存在である。「人格」はその精神性によって自らを決定することができる。そして「人格」がたんに完結した存在であるばかりか、その統一性と全体性とをより完全なものにしてゆく。現代のようにニヒリズムと悪しきヒューマニズムによって「人格」が否定され、無視される傾向が強くなればなるほど、われわれはむしろ「人格」を究極的に価値づける根拠の一つである「神の似像性」を強調せざるをえなくなる。(このことは本論の結論部で詳細に検討することになるだろう。)

第二の命題

—— 人格は分割も統合も不可能な存在である ——

第二に、「人格」は上述のように「分割」が不可能なばかりでなく、「総合」もできない。「人格」を分けることも混和することもできない理由は、「人格」が統一体であるばかりでなく、全体 (Ganzheit) でもあるから」(9) に他ならない。「人格」と逆の位置にある「有機体」は容易に分割も混和も可能であり、これが有機体の繁殖の条件でありまた前提となる。

この点に限って言えば同じ「人間学的心理学」(ヒューマニスティック心理学) (10) に属しているカール・ロジャ-

ス (Caral Ransom Rogers, 1902-1987) は、人間を他のあらゆる生命と同一の地平で理解しており、フランクルの人間理解とまったく対照的である。さらにフランクルもロジャーズと同様にドリュージュ (Hans Driesch, 1867-1941) によるウニの分割卵の実験を引き合いに出して自らの人間観を説明しているのだが、その解釈の観点が正反対なのである。フランクルがウニと人間との相違点を強調することによって、人格は分割不可能でありかつ総合不可能であるという第一と第二の命題を傍証しようとするのに対して、ロジャーズは分割卵でさえ完全な個体として成長するウニの卵の成長力に注目して、ウニとの共通点から人間の本質を説いている。少なくともこの点に限っては、同世代のロジャーズに比べて、フランクルの考え方のほうが、ずっと古典的な近代主義の枠内にあったと、臨床心理士でフランクル研究家の諸富祥彦 (1963) は鋭く指摘している。(11)

私見によれば、フランクルの投げかけているこの事實は、現代の最先端科学がもたらしている深刻な次の問題を見事に浮彫りにしている。すなわち、特に現代科学における人間の「人格」に関わる問題、たとえば、「脳死判定」をめぐる問題、それに関わる「臓器移植」

の問題などは、臓器提供を待つ立場の人々には朗報であり、その含み持つ社会的意義も十分認められるべきものである。しかしそれは、どこまでも臓器提供者の自発性を尊重し、また脳死の可能性がある患者自身への慎重な脳死判定ということが大前提である。もしそうでなければ、脳死の兆候が出始めた患者でさえ、紛れもない「人格」をもつ存在であるという神聖な事実を棚上げにされかねないからである。

近年の「生命倫理 (バイオエシックス)」における議論のなかで、最も重要なものの一つに、オーストラリアの哲学者、トゥーリー (Michael Tooley, 1941-) によって導入された「パーソン論」の問題がある。哲学的理念としての「人格」が、現実の人間の生命を人為的に左右する際の規準として「適用」されるときに問題が生ずる。トゥーリーの問題提起はフランクルが懸念している現代の問題を多く含み持っている。トゥーリーの基本姿勢は、たんに「生物学的なヒト」であるだけでは生存するための権利をもつとはいえず、自己意識をもった存在としてのパーソンのみが生存権をもつ、というものである。この説では「人工妊娠中絶から尊厳死、脳死にいたるまでのさまざまな生命倫理の問題のそれぞれに対して、具体的な『回答』を一貫し

た仕方と与えることができる。(12)

ここで「パーソン」とは、「自己意識をもった存在」を意味するが、たとえばエンゲルハート(H. Tristram Jr. Engelhardt, 1941-)は、「自己意識をもった理性的存在者」を厳密な意味でのパーソンと規定して、それ以外のたとえば幼児や知的な面でハンディをもつ人間、また重度の精神的ハンディをもつ人間などは、「最小限の社会的行為に参加する能力」をもつかぎりにおいて、あたかもパーソンのように扱われる「社会的意味でのパーソン」であると主張する。またエンゲルハートによれば、無脳症児や脳死状態に陥った成人はこの「社会的意味でのパーソン」ですらない。(13)

トゥーリーは、自己意識に基づく利害関心の存在こそが生存権の源泉であると考える。さらにエンゲルハートは、自己意識をもった存在のみを道徳的存在であると規定したうえで、道徳的に行為する者だけが道徳的に扱われる権利を有するという極端な思想を唱えており、ここに至っては「人格の自己中心主義」に陥っていると云わざるをえない。(14)

エンゲルハートは、胎児は人格ではないから必然的にすべての中絶は許容されうると考えているし、トゥーリーもまた、胎児だけでなく新生児や自己意識を持た

ない大人も生存権をもたないと主張する。こうした極端な「パーソン論」に共通するのは、人格というものをひじょうに狭く、自己意識的で知性的な存在者に限定しようとする態度である。ここでの深刻な問題は、「人格」が論じられるときに、たとえば中絶の対象となる胎児、脳死状態や植物状態の人間、さらには自己意識がなかったり知性的でない人間存在は「人格」ではなくなるという考え方である。筆者はここにパーソン論の危険性を感じる。また平石隆敏(1958-)もまたこうした「パーソン論」が、「自己意識的で知性的な人間」のみを前提として議論される限り、建設的な議論にはなりえないのではないかと「パーソン論」を厳しく批判している。(15)

フランクルによれば、「人格」そのものは繁殖させることはできない。むしろ「次々と繁殖を続けてゆくもの、両親の有機体から作り出されるもの、それはただ有機体だけ」(16)であり、「人格とか人格的精神とか精神の実存とかを、人間が次々に譲り渡してゆくこと」(17)はけっしてできない。そこで遺伝子操作による「クローン動物の生産(製造)」という「バイオエシックス」の投げかける問題を考えた場合でも、「人間存在」が「人格」の次元ではなく、たんなる代替可能な「有

機体」あるいは「物存在」というレベルでの議論になりがちな点に筆者は深い危機感を抱く。たとえ「人格」についての議論が展開されても、それはせいぜいフランクフルトがいうところの「心理的レベル」かもしくは社会学的な人間存在として発生する問題に終始されがちであり、われわれがめざす「人格論」の核心に触れる「バイオエシックス(生命倫理)」の文献はまだ数少ない。とはいえそのなかでも、現在のところ、バイオエシックスに関する信頼のおける文献としては哲学者の加藤尚武(1937)の著作(8)が問題提起の鋭さとしては優れていると思われる。

第三の命題

—— 個々の人格は絶対的に新たなものである ——

第三に、個々の「人格」はすべて「絶対的に新たなもの」(ein absolutes Noun)である。フランクフルトは、両親でさえ自らの子どもが生まれ来るとき、子どもの誕生の真の責任者ではないという。せいぜい両親は、「一個の新たな人格が現存在の中へはいり込んで来るときにいつもきままって起こる、あの奇跡の単なる証人(Zeuge)である」(9)にすぎない。なぜなら「新たな人格」が注ぎ込まれるのは、「神の行為」として

創造されるものであり、けっして「生殖」の間ではないことをフランクフルトは確信するからである。つまり「生殖」の行為は「絶対的なもの」によってなされ、それゆえにこそ時間と空間を超えた「静止せる今」のなかで生ずるものであるとフランクフルトは考える。つまり、「この新たな人格は神によって行為として創造されるもの」(20)である。

私見ではあるが、こうした論証を自然科学の訓練を徹底的に受けてきた精神科医フランクフルトがあえて強調するのは、彼が宗教的立場に強く固執するからではない。そうではなく、むしろ客観的に人間存在を考察するならば、また精神科医として日々、心身症などの患者と接しながら科学的な臨床経験を深めれば深めるほど、どうしても人間存在の本質が、何らかの「超越的なもの」との関わりなしには説明しえないからではないかと筆者は推察する。(このことはロゴセラピーが、いかなる宗教や思想に対しても開かれており中立の立場を堅持することとまさか矛盾するものではない。)

この点に関しては、教育学者の西平直(1937)が近著、『魂のライフサイクル』の冒頭部分でフランクフルトと類似の表現をしており筆者にはきわめて興味深く感じられる。西平直は言う。「死んだ後、自分が存

在しなくなることは怖かったが、生まれる前、自分が存在していなかったことは、なぜか怖くなかった。それも、不思議だった。なぜ怖くないのかも不思議だったが、自分がどこから来たのかは、もっと不思議だった。いつ、この自分になったのか。（改行）後に、生殖の話聞いた時は、そんなことだったのかと、少し納得したが、しかし、精子と卵子の結合体の中に、いつ、この「わたし」が入り込んだのか。やはり、本当のところはよくわからなかった。」(21)（傍点筆者）

第四の命題

——人格精神的なものである。精神そのものは「病をなさい」——

その意味で第四に、「人格は精神的なもの」(22)であると言えよう。フランクルにしたがえば、「有機体」とは諸機関や道具の総体にすぎず、「人格」はその道具を使って「表現する」何かである。だからこそ、「人格は行動し、また「自」を表現し得るために、みずからの有機体を必要とする」。(23)「有機体」はその限りにおいて利用価値を持つ、とフランクルは人格と有機体の関係を把握している。

これとの関連で、フランクル研究家のトウィディ

(Donald F. Tweedie, 1926-) は次のように述べてい

る。「したがって、有機体は道具 (tool) としてこそ、非常に有用性の高いものであるが、人間のもっている本當の価値 (worth) は、生きることがどれ程社会の役に立つかとか、その人が社会的にどのくらい有用であるかということとはまったく無関係だといえよう」。(24)

「利用価値」の反対概念は「尊さ」の概念であり、この「尊さ」は人格のなかだけに属するものである。ここから現代科学の抱える深刻な問題、たとえば「安楽死」などの不当性の根拠も明確になってくるだろう。「あらゆる個々の人格に備わっているこの無条件の尊さを知っている人は、また人間の人格に対して——（中略）不治の病人に対しても、いや、不治の精神病者に対しても——無条件の畏敬の念を抱く」(25)というフランクルの言葉は深く重い意味をもって現代社会に迫ってくる。

フランクルと同様の人間観は、最近の日本老年医学会の主張にも見受けられる。同医学会は一九九八年、終末期を迎えた高齢患者に対する医療についての「立場表明」をまとめるために倫理委員会をつくり、二〇〇〇年六月、痛みを和らげる「緩和ケア」が患者の生活の質を向上させることなどを盛り込んだ「立場表明

案」を公表した。

倫理委員会メンバーで名古屋大学医学部助手の植村和正 (1957) は次のように述べている。「患者の意思に関係なく、周囲が勝手に『もう年だから』と治療の是非を判断するのは、間違いです。」^⑧と。「立場表明」のなかの主要な考え方を紹介すると、①高齢であるという理由により、適切な医療が受けられない差別に反対する。②「終末期医療」とは、それ自体が専門性を要求される「緩和ケア」を主体とするものである。ここで「緩和ケア」とは、痛みやその他の病状を和らげ、患者の心理的・精神的な要求に耳を傾けることにより、患者およびその家族に対して援助を提供し、患者の生活の質を向上させるケアを意味する。^⑨こうした医療現場の人々が患者の「人格」の尊厳をどのように考えるべきかという問題の視点は、近年ますますフランクルの「人格論」のそれと類似してきたように思える。

こうした医療現場の取り組みを支援する考え方として、フランクルの次の姿勢は貴重な問題提起と言えよう。フランクルは、本当の意味での「精神病」などというものは存在しないと考えている。なぜなら「精神」つまり「精神的・人格」それ自体はけっして病気にはな

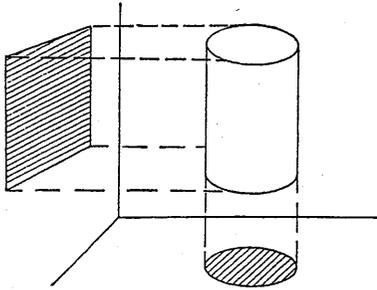
りえないからだという。精神病の背後にも、精神科医の眼にすらほとんど映らないけれども、「精神的・人格」は現に存在するということは、精神医学の信条であるべきだとフランクルは強調している。これが精神医学の第一の信条である。これはつまり「前景に出ている精神病の症状の背後にもなお精神的・人格は失われることなく存続しているという信念」^⑩に他ならない。また第二の信条とは「人間の中にある精神的なものがないかなる制約のもとでも、またいかなる事情のなかでも人間に付随した心身から身を引き離し、みずからと心身との間に実り豊かな距離を置くことができる」というこの精神の能力に対する信念である。^⑪こうしたフランクルの思想は、先のトゥーリーの「パーソン論」批判の強力な根拠づけとなりうる言説である。

人間を「人格」として扱うのではなく、たんなる「有機体」としてしかみようとしない現代医学に広まっている人格軽視の風潮のなかで、ひとたび修理不能となつた「有機体」は、「利用価値の喪失」というただそれだけの理由で平気で「安楽死」へ差し向ける危険が増大している。生物学(生理学)や心理学がこうしたいわゆる「心理主義」に陥っている場合には、たとえ「人間」そのものを学問の対象にしていようと、そ

これらの学問はけっして「人格」に到達することはありえないとフランクルは強く批判している。

人間を多様であるにもかかわらず、統一されているものと定義づけるフランクルはこれとの関連で、自らの「次元的存在論」を説明するためのアナロジーとして次の幾何学的な次元の概念を用いている。「次元的存在論」の第一法則は「一つの同じ現象が、それ自身の次元からより低次の別の諸次元に投影されたときは、個々の像が互いに相容れないようなかたちで描かれる」⁽³⁰⁾

たとえば「図①」において、三次元で初めて表すことのできるコップが水平および垂直の二次元的平面に投影されると、水平面では「長方形」が、垂直方向では「円」が映し出される。これらの像は互いに相容れないものである。ここで何が示唆されているのである



「図①」フランクル著、『意味への意志』26頁

うか。つまり「人間が、三次元的な空間において初めて正確に捉えられうるもの、つまりコップのようなものだとすると、それが二次元的な平面に投影されるとそこに映し出されるのはもはや人間以下の、一面的な人造人間の像」⁽³¹⁾（傍点筆者）にすぎなくなることがわれわれには理解できる。

「次元的存在論」が心身問題を解決する決定打にはならないが、なぜ解決できないかをこの「図①」で明確に説明することができる。フランクルは言う。人間の体と心が多様であるにも関わらず「統一体」であることが、「生物学（生理学）的次元」（たとえば水平面の円）あるいは「心理学的次元」（たとえば垂直平面の長方形）では見出せないのは当然である。むしろ、人間が第一に投影される「精神論的次元」（三次元上実際のコップ）で初めて、「統一体」としての人間が把握しうるのである。⁽³²⁾

さらに重要なのは、「図①」のこのコップは、「閉じられた影の図」である長方形や円と違って「開かれてある器」なのである。このことから人間の「心」対「体」の問題と同時に実存的な「選択の自由」の問題が明確になる。コップの「開放性」は、水平と垂直の次元では必然的に消失してしまうように、「人間も、

それ自身の次元よりも低い次元に投影されれば、刺激に対する生理学的反射であれ、心理学的反作用や反応であれ、閉じられた体系になる。⁽⁶³⁾動物はその種に特有な「環境」に縛られ「閉じられた体系」のなかでのみ生きることが出来る。他方、人間は世界に対して手を伸ばしまさに「開かれて」あり、他の存在と愛し合い、満たすべき意味に満ちた世界に生きるのである。ここに実存的な「選択の自由」の根拠が存するのである。

ホメオステイシス(恒常性)原理に執着しているような「動機理論」⁽⁶⁴⁾は、人間を「閉じられた体系」として現在でも扱っている。これらの学理論は、特にスイスの生物学者ポルトマン(*Adolf Portmann, 1897-1982*)とドイツの社会心理学者のゲーレン(*Arnold Gehlen, 1904-1976*)のみごとな洞察である。「人間存在の本質的開放性」を無視することになる。そこでフランクフルは言う。「人間存在の自己超越性によって、人間であることは常に、それ自身以外の何かかだれかに向けられており、目ざしていることを意味する」。⁽⁶⁵⁾生物学(生理学)的および心理学的次元ではこれらの人間的特質はすべて消失してしまうのである。しかしながら、生物学のおよび心理学的次元における人間

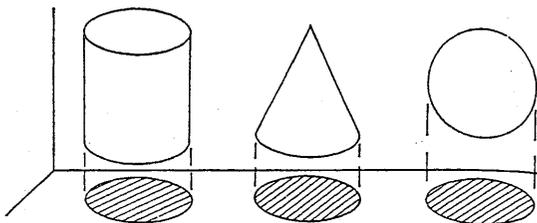
の見かけ上の「閉鎖性」は、もはや人間の人間性と矛盾しなくなる。なぜなら「低次元での閉鎖性は、円柱状のコップの開放性であれ人間存在の開放性である、高次元での開放性とまさに両立できる」⁽⁶⁶⁾からである。

こうした考え方により、ワトソン(*John Broadus Watson, 1878-1958*) 派行動主義、パフロフ(*Ivan Petrovich Pavlov, 1849-1936*)の反射学、フロイト(*Sigmund Freud, 1856-1939*)派の精神分析学、アドラー(*Alfred Adler, 1870-1937*)派心理学のようなそれぞれ異なる接近法についても、それらは「ロゴセラピー」によって無効になるのではなく、むしろ「ロゴセラピー」によってもっと高次の次元から眺めることによって橋渡しが可能となる。⁽⁶⁷⁾ノルウェーの心理療道家、ブジャルネ・クビルハウグ(*Bjarme Kveibug*)が特に学習理論と行動療法に関して述べたように「これら諸学派の発見はロゴセラピーによって再解釈、再評価されるし、またそれによって再人間化される」⁽⁶⁸⁾ことになる。

この文脈でわれわれが注意しておかねばならないのは、「低次の次元に対して高次の次元というとき、価値判断を意味しているのではないという点である。「高次」の次元というのは、より包括的な次元を意味

しているだけである。この点についてフランクルは、ハーバード神学校の教授ミーティングでの興味深いエピソードを紹介している。フランクルが「次元的存在論」を紹介した後の質疑応答で、神学者パウル・ティリッヒ (Paul Tillich, 1886-1965) が熱心にフランクルに質問した。フランクルが「高次の次元」という概念を使用したのに対してティリッヒは「より包括的な次元」の概念を主張し、フランクルが納得するまでは満足しなかったとフランクルは述懐している。(39)

次にフランクルの「次元的存在論」の第二法則によれば、「異なる諸現象が、それら自身の次元から低次の次元に投影されると、そこに描き出される像は多義的である」。(40) 「図②」でフランクルが示しているのは円柱、



「図②」フランクル著、『意味への意志』27頁

円錐および球で、それぞれの上から光を投げかけたとき、それらが水平面に映し出す三つの影のモデルである。水平面に生ずる影はすべて同じ円として描きだされるため、三つの影の上にある物体が、円柱なのか、円錐かそれとも球なのかをわれわれは推論することができない。こうした生物学（生理学）的あるいは心理学的次元では、「諸々の価値を精神的なもの空間から心的なもの平面へと投影し、そこでこれらの価値を多義的な曖昧なもの」(41) にしてしまう。このイメージはどのように人間学と存在論に応用できるだろうか。これを人間の側に照らして考えてみると、「投影」という心理主義においては、真の宗教的な神秘直観を経験した事柄と、任意のヒステリー患者の幻覚との間にはいかなる区別もつけられないという問題が生じてくる。

(42) たとえば第一円の影を「幻聴を有する分裂病」のケース、第二円の影を「ジャンヌ・ダルク」(Jeanne d'Arc, 1412-1431) を表すものと仮定する。精神医学的見地からすれば、この聖女は分裂病のケースとして診断されねばならないだろう。またわれわれが精神医学的照合枠に自己を限定する限り、神のお告げを信じて、後期百年戦争の危機を救ったフランスの国民的英雄ジャ

ンヌ・ダルクも分裂病患者にすぎなくなる。しかしわれわれが「精神論的次元」で彼女を考察する場合、彼女の神学的・歴史的重要性を観察するやいなや、ジャンヌ・ダルクは分裂病患者以上のもの、つまり「聖女」となる。彼女がたとえ精神医学の次元では分裂病患者であろうとも、そのことで「彼女が聖女である」という事実はいささかもゆらぐものでない。(43)

もう一つの身近な例を紹介しよう。重要な任務を達成して得られる「充実感」も、好きな人との出会いによって生じた「幸福感」も、薬物を使用して得られた「人工的な快感」も、それが同じ心理学的平面に映し出されると、どれも見分けのつかない単なる「快」という心的状態に変質する。この「図②」で言えば、実際の円柱、円錐および球がすべて同じ円の影になり、そこではその「快」が何によってもたらされたのかは無視されてしまう。このように心理的平面に投影されてしまえば、もともとの経験内容や志向対象が円柱・円錐・球とそれぞれ異なるにもかかわらず、まったく同じ「快」(三つの同じ円の影)に映ってしまうのである。(44)

第五の命題

—— 人格は実存的なものであり、そして人格は決断する ——

第五にフランクルによれば、人格は「実存的なもの」である。これはつまり「人間はつねに彼自身の可能性として実存しているのであって、人間はこの可能性に向かって、あるいはそれに反対してみずからの決断を下すことができる」(45)ことを意味する。フランクルは、人間は人間的であるということの根本的な不条理に耐えねばならないと主張するサルトル (Jean Paul Sartre, 1905-1980) などの実存主義者たちと反対の立場に立つ。むしろ、「人間は自分の知的水準において究極の意味を把握できないその無能力さに耐えるべきだ」(46)とフランクルは考える。ここで「究極的な意味」とは、もはや知的認識の問題ではなく実存的行動に関わる問題を解明することでありそれは一つの「決断」を含むこの「決断」についての以下の事例はフランクル自身の経験である。

米国が第二次世界大戦に突入する直前、フランクルは米国への入国ビザを受けるために、ウィーンにある米国領事館に呼ばれた。両親はフランクルのビザが交付されしだい、オーストリアを離れることを希望していたが、フランクル自身は、最後の瞬間に両親のもと

を離れるべきかどうかで深く悩んだという。なぜならフランクルには、両親がユダヤ人であるというだけの理由でいずれ強制収容所に送り込まれるであろうことが判っていたからである。ちょうどそのような時、フランクルは家のテーブルの上に、一片の大理石が置かれてることに気づき、父にそれが何であるかを尋ねた。

父の説明によれば、その大理石は、ウィーンで一番大きいユダヤ教会が焼き払われたときに、彼の父が教会の焼け跡から見つけ出したものだという。彼が家に持ち帰ったのは、その石片に旧約聖書の「十戒」がヘブル文字で刻まれていたからである。フランクルが「十戒のうちどの箇条ですか？」と父に真剣に尋ねると、父の答えは「あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きる事ができる。」（旧約聖書、出エジプト記、二〇章一二節、新共同訳聖書）であった。そのときフランクルは自分の祖国オーストリアに両親ともども残り、米国籍のビザの放棄を決断したという。(47)

フランクルがこうした「決断」をくだすことができたのは、その大理石にCaCO₃（炭酸カルシウム）以上のものを見出したからである。こうした自らの切迫した経験をもとにフランクルは言う。「人間は決断を

避けることができない存在である。実存は必ず人間に決断を促すものである。(中略)人間は、こうした決断を通して自分自身を決定づけて行くのである。こうして人間は、絶えず自分自身を形成し、再形成していくのである」。(48)

このような人間理解はヤスバース (Karl Jaspers, 1883-1969) のいう「決断」する存在を基盤としており、「衝動」に駆りたてられる存在を前提とする精神分析の立場と真つ向から対立する。つまり「人格は実存的である」と言う場合、究極的な意味で人間は責任を持ち、自由であるということである。「決断する存在」としての人間の在り方は、精神分析のいう「衝動存在」とは正反対の人間理解である。ここから、**決断する実存的人間は責任をもちえるが、精神分析の捉える衝動的人間は責任をもち得ないと考えるのが妥当であろう**。そのことをフランクルは次のように表現している。

「ほかならぬ意味と価値の世界、価値の尺度あるいはその軸点、あらゆる価値の段階の頂点、すなわち神が、人間の責任ということの中に同時に与えられている」(49) (傍点筆者) のである。

フランクルの「実存分析」(ロゴセラピー) の観点においては、精神分析とは逆に、人格は「衝動」によつ

て決定されるのではなく、「意味」によって方向づけられるものなのである。また人格は「快樂」を求めるのではなく「価値」を求めてゆくものである。フランクは「性的衝動性」(リビドー)という精神分析的な概念も、「社会的拘束性」(共同感情)という個人心理学的概念も、「愛のデカダンの・欠損的な様態」として退けたうえで、「愛」について次のように述べている。

「愛とはいついかなる場合にも我と汝との関係」であるが、「精神分析的な観点においては、この関係のうち『エス』だけが——つまり性愛だけが——残っているだけであり、一方個人心理学的な観点においては普遍的な社会性だけが(中略)残されている」⁶⁰⁾にすぎないとして、精神分析のおよび個人心理学的な「愛」の解釈をはずれなものとして鋭く批判している。

註

(後編に続く)

- (1) V.E. Frankl, *Logos und Existenz: Drei Vorträge*, Amandus Verlag, wien, 1951.
佐野利勝・木村敏訳『フランク著 著作集④ ロゴスと実存——三つの講演——』所収 みすず書房(一九六二年)一九五〇年、ザルツブルク大学週間行事として行われた数名の教授との討論会でフラ

ンクルがおこなった冒頭発言の内容である。他に「P.イルデフォンス・ベートシャルト・ベネディクト会教授(ザルツブルク)、アロイス・デンブ博士(ミュンヘン)、レオ・ガブリエル博士(ウィーン)が参加した。

(2) 諸富祥彦著、『フランク心理学入門——どんな時も人生には意味がある——』、春秋社、一九九七年、四月、第一刷、一二月、第二刷、二六二頁参照。

- (3) Vgl. V. E. Frankl, *Homo Patiens. Versuch einer Pathodizee*, Franz Deuticke, Wien, 1950. フランク著、真行寺功訳、『苦悩の存在論』、新泉社、一九七二年二月三十一日、第一刷、訳者あとがき、二二六頁参照。

(4) フランク著、前掲書、訳者あとがき、二二六頁参照。

- (5) フランク著、前掲書、訳者あとがき、二二七頁参照。

- (6) Vgl. Viktor Emil Frankl, *Logos und Existenz: Drei Vorträge* 1951 S. 49. フランク著、佐野利勝・木村敏訳、『ロゴスと実存』「人格についての十の命題」、一六二頁参照。

- (7) *Vel. V. E. Frankl, a. a. O. S. 49.* フランクル著、前掲書、一六二頁参照。
- (8) *Donald F. Tweedie, Logotherapy and the Christian Faith, Baker Book House, 3 Auflage, Grand Rapids, Michigan, 1961-1972. p.69.* ヌナル・トウィディ著、武田健訳、『フランクルの心理学』みくに書店、一九六八年、第一刷、一〇〇頁。なおトウィディは本書のp.50. 訳書、九九一―一〇三頁で、「人格についての十の命題」の人間学的見解を要約して詳細に論じており参考になる。
- (9) *Viktor Emil Frankl, Logos und Existenz, S. 50.* フランクル著、『ロゴスと実存』「人格についての十の命題」、一六二頁。
- (10) 人間学的心理学(*humanistic psychology*)とは、人間を「無意識」に支配されているとする「精神分析」や、外的環境に支配されているとする「行動主義」に対して、人間は自由意志をもつ主体的な存在であると考ええる立場をいう。
- (11) 諸富祥彦著、『フランクル心理学入門』、二六四頁参照。
- (12) 水谷雅彦著、塚崎智・加茂直樹編、『生命倫理の現在』、世界思想社、一九八九年六月二〇日、初版、一三九頁。
- (13) 水谷雅彦著、前掲書、一四〇頁参照。
- (14) 水谷雅彦著、前掲書、一四〇頁参照。
- (15) 平石隆敏著、前掲書、二〇九―二一一頁参照。
- (16) *Viktor Emil Frankl, Logos und Existenz, S. 51.* フランクル著、『ロゴスと実存』「人格についての十の命題」、一六三頁。
- (17) *Viktor Emil Frankl, a. a. O. S. 51.* フランクル著、前掲書、一六三頁。
- (18) 加藤尚武著、『脳死・クローン遺伝子治療』、PPT研究所、一九九九年九月三日、第一刷、一〇二頁―一四一頁参照。
- (19) *Viktor Emil Frankl, Logos und Existenz, S. 51.* フランクル著、『ロゴスと実存』「人格についての十の命題」、一六三頁。
- (20) *Viktor Emil Frankl, a. a. O. S. 51.* フランクル著、前掲書、一六三―四頁。
- (21) 西平直著、『魂のライフサイクル——ユング・ウィルバー・シュタイナー』、東京大学出版、一九九七年、七月一五日、初版、一一二頁。
- (22) *Viktor Emil Frankl, Logos und Existenz, S. 51.* フランクル著、『ロゴスと実存』「人格についての

- 十の命題」一六四頁。
- (23) Viktor Emil Frankl, a. a. O. S. 52. フランクル著、前掲書、一六四頁。
- (24) Donald F. Tweedie, *Logotherapy and the Christian Faith*, p. 69. フェナルズ・トウ・ディ著、『フランクルの心理学』、一〇二頁。
- (25) Viktor Emil Frankl, *Logos und Existenz*, S. 52. フランクル著、『ロギスと実存』「人格についての十の命題」、一六五頁。
- (26) 二〇〇〇年九月二八日、朝日新聞朝刊。
- (27) 二〇〇〇年九月二八日、朝日新聞朝刊参照。
- (28) Viktor Emil Frankl, *Logos und Existenz*, S. 53. フランクル著、『ロギスと実存』「人格についての十の命題」、一六五頁。
- (29) Viktor Emil Frankl, *Logos und Existenz*, S. 62. フランクル著、前掲書、一七三頁。
- (30) Viktor Emil Frankl, *THE WILL TO MEANING — Foundations and Applications of Logotherapy*. 1969. 1988. p.23. フランクル著、大沢博訳、『意味への意志——ロギセラピーの基礎と適用』、ブレーン出版、一九七九年四月一〇日、初版、二六頁。
- (31) 諸富祥彦著、『フランクル心理学入門』、一七五頁。
- (32) Cf. Viktor Emil Frankl, *THE WILL TO MEANING*, p. 25. フランクル著、『意味への意志』、二八頁参照。
- (33) Viktor Emil Frankl, *op. cit.* p. 25. フランクル著、前掲書、二八頁。
- (34) たごまはキャンノン (Walter Bradford Cannon, 1871-1945) は、生理学的過程を中心とする固体内部の平衡状態が失われるとき、これを回復させるために行動が生起するというホメオスタシスの原理を提唱した。一方、行動主義心理学者のハル (Clyde Leonard Hull, 1884-1954) は、ホメオスタティックな不均衡の状態を解決するために要求および動因が生起すると考える。
- (35) Viktor Emil Frankl, *THE WILL TO MEANING*, pp. 25-26. フランクル著、前掲書、二八一—二九頁。
- (36) Viktor Emil Frankl, *op. cit.* p. 26. フランクル著、前掲書、二九頁。
- (37) Cf. Viktor Emil Frankl, *op. cit.* p. 26. フランクル著、前掲書、二九頁参照。
- (38) Viktor Emil Frankl, *op. cit.* p. 26. フランクル著、前掲書、二九頁。

- (39) Cf. Viktor Emil Frankl, *op. cit.* p. 26. フランクル著、前掲書、三五頁参照。
- (40) Viktor Emil Frankl, *op. cit.* p. 23. フランクル著、前掲書、二七頁。
- (41) Viktor Emil Frankl, *Logos und Existenz*, S. 55f. フランクル著、『ロゴスと実存』「人格についての十の命題」、一六七頁。
- (42) Viktor Emil Frankl, *a. a. O.* S. 56. フランクル著、前掲書、一六七—一六八頁参照。
- (43) Cf. Viktor Emil Frankl, *THE WILL TO MEANING* p. 29. フランクル著、『意味への意志』、三二—三三三頁参照。
- (44) 諸富祥彦著、『フランクル心理学入門』、一七七頁参照。
- (45) Viktor Emil Frankl, *Logos und Existenz* : S.56. フランクル著、『ロゴスと実存』「人格についての十の命題」、一六八頁。
- (46) Viktor Emil Frankl, *Psychotherapy and Existentialism*, 1967. p.33. フランクル著、高島博・長澤順治訳、『現代人の病——心理療法と実存哲学——』、丸善株式会社、一九七二年一〇月二〇日、初版、四四頁。
- (47) Cf. Viktor Emil Frankl, *op. cit.* pp. 34-35. フランクル著、前掲書、四五頁参照。
- (48) Viktor Emil Frankl, *op. cit.* p. 35. フランクル著、前掲書、四六頁。
- (49) Viktor Emil Frankl, *Logos und Existenz*, S. 57. フランクル著、『ロゴスと実存』「人格についての十の命題」、一六九頁。
- (50) Viktor Emil Frankl, *a. a. O.* S. 58. フランクル著、前掲書、一六九—一七〇頁。